

大学入試

現代文 用語集・資料集

重要語 630 語収録

評論キーワード カタカナ語 重要語彙（五十音順）
慣用句・故事成語 誤用に注意する語
読解の技法 頻出テーマ資料

この冊子の構成について

現代文の設問は、結局のところ「この語を知っているか」「この筆者の言い方の型を知っているか」の二つに帰着します。本書は前半で語を、後半で型を扱います。

第1章から第5章までが用語集です。第1章には、評論文を読むうえで一語一語が論の骨組みになる語を集め、原資料の語義に対概念や使われ方の補説（▶）を添えました。第2章はカタカナ語、第3章は重要語彙を五十音順に並べた本体、第4章は慣用句・故事成語・四字熟語、第5章は入試で問われやすい誤用語です。

第6章・第7章が資料編です。第6章では要約・接続語・指示語・記述解答という四つの設問形式について、実際の授業プリントで扱った着眼点をまとめました。第7章は頻出テーマ「異文化理解」「ステレオタイプ」の内容資料です。テーマを先に知っておくと、初見の文章でも筆者の主張の向かう先を予測できます。

巻末に五十音総索引を付けました。語がどの章にあるかは索引で引いてください。

■ 収録内容

章	内容	語数
第1章	評論キーワード（存在／認識／自己と他者／社会／芸術）	83 語
第2章	カタカナ語	47 語
第3章	重要語彙（五十音順）	360 語
第4章	慣用句・故事成語・四字熟語	166 語
第5章	誤用に注意する語	12 語
第6章	現代文読解の技法（要約・接続語・指示語・記述）	—
第7章	頻出テーマ資料（異文化理解／ステレオタイプ）	—
巻末	五十音総索引	630 語

■ この冊子の出どころ

語義はすべて、もとの『現代文単語集』『現代文用語集』の記述をそのまま用いています。第1章の「▶」以下の補説と、第6章・第7章の記述だけが新たに書き起こした部分です。

原資料に明らかな誤記があった箇所は改めました（「人口に膾炙する」→「人口に膾炙する」）。また、代表的な意味が落ちている語には※で補注を付けています。

第1章

評論キーワード

評論文では、一つの語が論全体の骨組みになっていることがある。ここに集めたのはそういう語である。語義（原資料）のあとに ▶ で補説を付けた。対概念のある語は、必ず対で覚えること。

■ 第1節 存在と世界のとらえ方

唯物論（ゆいぶつろん）

宇宙の根源は物質にあるとし、精神的なものはすべて物質の作用に基づくとする存在論上の立場

- ▶ 唯心論と対をなす。「物質が先、精神は後」。マルクス以降は歴史や社会を経済的な土台から説明する立場（史的唯物論）も指す。

唯心論（ゆいしんろん）

万物の本質を精神的なものに求め、物質的なものはすべてその所産であるとする存在論上の立場

- ▶ 唯物論の対概念。「精神が先、物質は後」。評論では「観念論」とほぼ同義に使われることがある。

汎神論（はんしんろん）

いっさいの存在は神そのものであり、神と世界とは一体のものであるとする宗教観・哲学観

- ▶ 世界の外に人格神を置く一神教と対比される。日本の自然観・アニミズムを説明するときに持ち出されることが多い。

形而上（けいじじょう）

哲学で、時間・空間の形式を制約とする感性を介した経験によっては認識できないもの・超自然的・理念的なもの

- ▶ 形而下と対。「かたちを超えたもの」＝目に見えない本質・理念の世界。

形而下（けいじか）

哲学で、感性を介した経験によって認識できるもの・時間や空間を基礎的形式とする現象的世界に形をとって存在するもの

- ▶ 形而上と対。「かたちをもつもの」＝目に見える現象の世界。二つはほぼ必ずセットで問われる。

イデア

理想

- ▶ プラトンの用語。個々の事物の背後にある永遠不変の本質。感覚でとらえる現象界と対比される。

ア・プリオリ

経験的認識に先立つ先天的・自明的な認識や概念

- ▶ 対義は「ア・ポステリオリ（経験のあとに得られる）」。カントの用語として評論に出る。

所与（しよよ）

①他から与えられること・解決されるべき問題の前提として与えられたもの ②哲学で、思考の働きに先立ち、意識に直接与えられている内容 ③心理学で、感覚に与えられているもの

- ▶ 「所与のもの」＝自分では選べず、初めから与えられている条件。評論では「自明の前提」を疑う文脈で頻出。

複雑系（ふくざつけい）

一つの原因に対する一つの結果という単純な関係ではなく、多くの要素がからみ合い干渉し合って成り立つ体系として物事をとらえる考え方

- ▶ 近代科学の要素還元主義（分けて調べれば分かる）への批判として登場する。生態系・都市・経済の議論で使われる。

不易（ふえき）

いつまでも変わらないこと

- ▶ 松尾芭蕉の「不易流行」（変わらないものと変わりゆくもの）で有名。伝統論では「不易＝本質／流行＝時代とともに変わる形」として対で使われる。

カオス

混沌

- ▶ 対はコスモス（秩序ある世界）。「混沌から秩序が生まれる」という筋立てで用いられる。

■ 第2節 認識・論理・思考のことば

アナロジー

類推

- ▶ 既知のものと類似から未知のものを推し量ること。説得力はあるが、似ているだけで同じとは限らない点が論の弱点にもなる。

カテゴリー

範疇

- ▶ ものを分類するための枠組み。「カテゴリー化」は認識の働きであると同時に、現実を切り縮める働きでもある。

パラドックス

逆説

- ▶ 一見すると矛盾しているが、よく考えると真理を突いている言い方。評論では筆者の主張が逆説の形をとることが多い。

アンチノミー

二律背反

- ▶ 同じくらい正しく見える二つの主張が両立しないこと。ジレンマが選択の板ばさみであるのに対し、こちらは論理そのものの背反。

アウフヘーベン

止揚

- ▶ 対立する二つを、どちらも捨てずにより高い段階で統一すること。ヘーゲルの弁証法（テーゼ→アンチテーゼ→ジンテーゼ）の中心概念。

テーゼ

命題・定立

- ▶ 弁証法の出発点。これに対立するものがアンチテーゼ、両者を統合したものがジンテーゼ。

ジレンマ

両刀論法・進退兩難

- ▶ どちらを選んでも不都合が生じる状況。

コペルニクスの転換

従来の枠組みなどが一八〇度変化すること

- ▶ 地動説にちなむ。「見る対象が変わった」のではなく「見る側の枠組みが変わった」という点が要点。

コロンブスの卵

ある物事を誰かがやった後にやるのは簡単だが、それを初めてやるのは難しいということ

- ▶ 発想の転換の価値をいう。既成の枠を疑う話題で引かれる。

主客転倒（しゅかくてんとう）

①主と客の力関係が逆になること ②物事の軽重・本末などを取り違えること

- ▶ 評論では「手段が目的にすり替わった」という批判の型で使われる。

敷衍（ふえん）

意味や趣旨をおし広げて説明すること・例などをあげてくわしく説明すること

- ▶ 設問文の「傍線部を敷衍せよ」＝わかりやすく言い広げて説明せよ。

喝破（かつぱ）

誤った説を排し、真実を説き明かすこと・物事の本質を明言すること

- ▶ 筆者が他説を退けて核心を言い当てる場面で使われる。単に「大声で言う」ではない。

俯瞰（ふかん）

高所から見おろして眺めること

- ▶ 個別の事例から離れて全体の構造をとらえること。「鳥瞰」もほぼ同義。

管見（かんけん）